蠅を見て

蠅よ、なんぢはうれし
なんぢが倦み疲れし四肢の中に
そことなきやはらぎぞある、
そことなきうち顫ふ夢見心地に。

さかりなる息吹は空氣を曇らしぬ
空に群れゐる鈍銀の響
襲ひ來る翅に各〻の眼ありて

さながら豫知する如く世をうかがふ。

なんぢ等の恐怖の騷擾をやめ
貪るものの上に寄りつどへば
翅は黑きたくらみを下に藏み
しばしは輝く沈默の光に醉へり。

されど、今汝にとりてこの世は何ものぞや、
汝が曇りし澤、汝の四肢の上に
ゆるき夕の陰と共にさ迷ふ、
やはらぎもて、汝の背は麗はしく。

空と海と

そこにただよふものは耀く薔薇の心と
見ひらけるくれなゐの金色と
高く、この世のものならぬ戰慄と
無際限に聲を放ちわれらの耳にとどかぬ唄と。

海の上をかたむき駛る舟
疾く、疾く檝をにぎり
あをき、香りだつ蜿りのかなたに

空を身に浴びつつかくれゆく。
影は聳立つ港の内に
大いなる紫は長く垂れ
廣く波うちくる皷動をもて
空と海と一切の無言の中にしらべを合はす。

緑

われひとり待ちわびたりき。そこに
はてなき緑、波うちつつ高まり
恐れの麗はしさに胸染まりぬ。

失ひたりし母は、この時われを吸ひ寄りつつ
溫かき顏と、擴げし大きなる手もて
青く塗れし子を小さくする。

何たる笑なりしぞや、その母
われは見まもりつつ泣き、かくて身をつつむ薫りの中に眼を開けり。

蒼空は赤らみて花の如く
大いなる割れし蕋は
生きて動く昆蟲の觸角。

緑のながれは我が胸を傾けぬ
搖りあげ、またゆりあげ保てる中
たちまち母の笑より世界はすすみ入る。

帆綱

時は短し、帆綱のゆらめくのみ
搖らめく響のみ、
海水の眩ゆき晶玉の上に
煽られ、不安げに少時とどまる。

その身は顫ふ段階
柔らかき白日の風に吹かれて
聲なき聲を求め

のぼるを俟ちて、嘆けど。

短し、生命は帆綱のゆらめくのみ
搖らめく雫のみ、
はてなき綠、ながしめに
たちまち、汝が身を呑まんと身構ふ。

こゝ倦怠の海原か
和してなげく唄のたゆたひか
煙と光る波の上に、
帆綱はゆらめくのみ、ゆらめくのみ。

夜の小川

淀みなき流れの舌に
語り、かつ續けゆくものは焰なり、
休息なき夜の床に
蒼白き星の輝くごとき不眠の中に
暗き燐光の額をもて
夢に次ぎ、夢に次ぎ、語りゆくものは焰なり。

鹿ケ谷法然院にて

暗き森かげを風は過ぎゆき
光は空しき方に照りぬ
わがあゆみは白銀の空に落ちくる
落葉の痕とともにさ迷ふ。

谷間なる蒼ざめゆきし月は
寺の板戸の上を照らす
黒き木立と、水の流れの内よりして

終りなる、彼の蒼ざめゆきし月は。

水盤の水はひとり
冷たき沈默を破りて響く、
かの光、ながく、胸にひきて
のぞみも白くかたむく中。

あけがた

君が身の胸の上に通はす
白き氣のごとき呼吸
星の數知れぬまたたき
深くもゆらめく綠の夢より。

また、ほとりに風はふく
明けがたの下に壓へし薔薇の
隨より香氣をもちきたり吹く。

蒼みどりの暗き松は
枝と葉との觸りもて、
きこえぬばかりの調べの中
模様をあみいだすなり、君の上に。

夏草

夏ぐさ生ひしげりて
肥りゆく、そのこゑ、はげし。
塞がれし一つの口にあつまりて
その唄、單調に、しかも絶えず。

鬱憂の水の面は
動かぬさまに、その光を搖めかす。
絶えてなき風の、たまりみづに

何物の影も落ちず。

空しき心はそこにただ
焔ともえたつ虚無を夢見る、
そこにただ、全てに代ふる
悒鬱せさのあつまりを。

夕暮

やはらかき水の流れに
溶けてうつる、夕の聖き赤
その陰に織りまざるひらめき
空と地との、波うてる二つの谺。

谺の色緑に
ゆるきうねりとなる野
やゝ暗くしめりたれど空は

稻妻の中に默せし聖者の眼。

耕す車、小さく失せぬ、
さてまた黑き低音の獸ら
せはしき息の中に混じ合ひぬ
雜鬧するにほひの夢に。

かけりゆく色はただ二つ
つらなる雲を出でて見ゆ
夜きたりて、地はみづから
漂ふひびきとなり合はせつつ。

木の洞

足を地に、巖が根
また踏むも尊くて。

木の洞に、霞む日を
ながむる、わが眼。

焰よ、
日の色のあかき獸。

こは何人ぞや
故なく泣ける我が身は。

谿間

日の色は匂やかに遊ぶ
谿間の秋を、西に。

風のふくこころちし人は
故なくして笑ふ。

あゝ、山家の戸口を
われもまた在り佗ぶ如く。

草を藉き

草を藉いてありしが
山山暗くなりぬ。

木霊ありて枯木を
また身肉をふるはせつ。

散る落葉の、我ればかりぞ
空にはふる、けしき。

岩と鳥

色赤く染みぬ、
何とて動かぬさま
此岩。

寂びたる足元
燃え立つばかり
風來て搖るに
いとさびし。

鳥鳥、よろこび
空をとぶに
ここもと過ぎて光あり。

或る日の黄昏

灼熱、衰へし夏の
色の睦み合へる中
黄いろき髪かと見えて振る
頭よ、惱みにいたはられて。

痛み、なやみをおぼゆれ、この
あぢはひふかき黄昏
そも眞晝ならず耀く

木と木との表や裏。

たとへば海の眞中に
ゆられ搖られて捲かるる心地か
潮の頸を締め、胸もさだまらず
戲れて憎みて泣く。

雲雀

雲雀はあがる、やはらかに
森も畠も煙る中
綠したしき聲と聲
搖らるる空に落ちてゆく
晩春の日の靜けさよ
雲雀はあがる、さみしらに。

撓める枝

日の流れはひびくなり、赤き
ゆゑわかぬ歡び
倦み心地なるつぶやきの中に聞こゆ。

綠はあたたかし、野に
薫ゆりゆく靄の中
ながれてやまぬところに。

ささげし犧牲を今
蒼きうねりとなりて炷く
木木の傾き。

あゝ、倦みごこちなり、すべて
燦めく露のたまり
撓める枝にかかりて。

夜の野

野のさみしき巖に
むらがり落つる月かげ
生るる蝶のひかりは映ゆ。

沼の曇を今宵
吹きゆく風のすがた
すがたは波のうへ、幽に、またはなやかに。

したがふ野と森、影の中
しとどに濡れて重く
磨かるる泡の靄とぞなる。

ゆきかふ雲のひま
過しくる雨のみ、はやとぶ
引つつみ、すべての上を暗く。

あかき夕

暮れゆく日の唄を
赤らみし秋の梢に聞く
香り満ち、日は飛んで
隱れゆく蜜蜂の巣。

和らかき老人達
明日はまたその上に、夕燒せん、
にほふ雲は西東
しめやかに語らひ映る。

稻田

秋は香りの面をうつ
まだなほ熟れぬ黄いろの田
ものうき心に
たゆたふ、うらがなし
響の穗。

いぶせき蝗、
かよふらし去年、いく死にし昔

蕚とにほへ、草塚に
さびしさを鳴らす羽。

空て笑ふとなし
村の太鼓、
うつうつ識るてなし
赤いさるすべり。

日は深み、
香りは熟れてゆく
我が眼、聲音もなき
幻の稻を瞻めて。

宙の鳥

金色に放つ霧
痕つけてただ默す
宙の鳥。

野のさみしさ
暮れがてに
木木はその葉をそよがす、
長きこの默思の時を。

人は去らず、遠く
彈けとぶ色の中に
動かず、あまりに小さく。

あゝ、滿ちし秋の暮
よろこばし、唯なんとなく
さみしさ添へしけしき。

笑の露

日は傾き、うつろひぬ
長き枝そよがす木の
池の水面に、延びうつりて。

やゝさびし、君が面の
默然とあゆめるさま
ふたりが肩のかげも。

たひらかに移る時
鳥のさま、にほひ満ち
世は今、濃き色添ふけしき。

萬象(ものみな)、幽(かすか)となれり
日は落ちて稍〻しばし
笑の露とかがやく。

晩秋

秋の入江の日はさびし
風はささやかがやけど
波は寄る寄る見ゆれども。

暮れの心の切にして
蘆間の鳥のしば鳴くか
秋の入江の日は寂し。

雨心

朱に濁りし水は
黑き時雨に搔き亂されぬ、
永き世に倦むや、その唄
つぶやき休まぬ、波折の中。

翳せる木の枝、葉も見えぬ
端端、おもくふりかかり
幾反田、低みの畝を

あるかなきかに吹き戰がす。

ただ波の折るままにせよ
ゆき、また還り來て
おのがじし降る、雨心。

水に、空に、滿ちし
香りなく色なき雨
すがたははやも往きて
移し來よ。その上より、世を人を。

秋

暮るる陰の
幽(かすか)な休息(いこひ)
たちのぼりゆく
黄金(きん)と青のゆかしみ。

あゝ、さびしさ
奥まりし野のたたずまひ
木のおもてには笑ふ

茜(あかね)のにほひ。

すべての滅びなりや
いま、
秋の心地そぞろ
またなく、くちをしき
露(つゆ)の熟(みの)り。

現(うつ)在か、こたへせよ
いつの世か。
榮(はえ)え、またうつりて
心を搖るながめ。

花と果實

ゆらめく光落ちよ
重げにさらびやか
その身の榮によろめく
あはれなり、ただ雲母雲。

身もゆるぶ、何の薫りぞも
朽つる聲に泣くは
風と風の

子ら。
果實の道
なほ聲あり
塗れて咲き殘る
花の垢膩。

いつの代を見たりとなく
續く連ね、
あゝ、照りのぶる彼方ぞ
灰色なす。

紡車

薫り染み、色染みし紡ぐるま
ゆるく、ゆるくめぐりぬ、
藪かげ、日は闌けて聲音なし
ありと見れど幻の靜けさに。

姨ひとり、眞中にこれを廻はす、
その坐れる姿の無心
和らぐ光の核に

凝りし霞のかたち。

めぐり、また廻ぐりて
響は響をよぶ
長きふるへとなりて
果てもしらず傳ふ。

日は赤く、空も迫るけしき
そこここに結はへし絲の澤
蜘蛛の網のごとくにかすみ
姨はいま、端嚴に光りぬ。

田の刈跡

深田のうへに
冬の日のあゆみ
ゆるきけはひして
押しうつりつ。

人のかげ地に俯して
何をするぞ
沈默の眼、

その上を横ぎりつ。
白けし蘆の根を
鳥がくぐり
さみしく、さみしく
たまさかにあそぶなり。

日が光る、
深田の家の屋根
日が赤し、
押しうつる。

微雨

草の上に蝶きたり
さだかならぬ匂の中に
しほしほと雨光る。

やゝ遠き家も、阜も
みな雨なり。
あふるる土に動く
薄き鍬の刃。

柔らかし、おほけなし
天日を罩めて
地の鳥もささ鳴きす
なごやかに。

界の雨のうち
色のみ有り、
ゆるきゆるき其の調べを
つと立ちて消えゆく蝶。

湖水の印象

はてしなき水の灰色に
柔らかき岸べの緑、
にほひの觸るごとく
薄らかに匍へり。

その水をつくづく見れば
搖籃に稚兒はめざめ
あまりの慕はしさに

泣きも得ぬまなこの如し。

母はいま、その手を
蒼白きその手をのべて
くちづけする横顔……
時ははたと休み、稚兒の笑ひもせず。

破船

日が發てる靄の中に
濁れる河、あかく赤く飜へりぬ。
波は波を趁ひて
ゆくてはるかに光る。

堤の小屋は傾き
破船の舳、砂にうづもれ
目に痛き鷄頭花の

からくれなゐ。

空と地とのただ中に
今か曳きわたす、幻の綱を、
かげろふのゆらゆらに燃えて
充ちあふるる無言。

ひらめく赤き波をりをり
流れてまたきたり
鷄頭花の黒き種子
ほろほろと砂に照りこぼるる。

慈悲

やゝ重く濕りし都は
さりげなき風の中にあり、
竝みつづく甍の目路の果ては
灰色雲の夢に融けてまぢるならむ。

さだめなき光の中に浮きて
煤けぶり、北よりまた南へ
去りもやらず躊躇へるその姿は

虚空にさらぼふ塚のごとし。

人はみなその下にはたらき
眞鑄の日ざし折折差し來れば
その日ざしの隙を
軋りつつ、揉みつつ叫べり。

されどいま風は濕り
高き家も低き家も布に似たり、
ただ思ふべし、煤の中
隱れたる慈悲の一點光を。

小詩二章

秋も末、會津に旅したる時

月の光裂くるを聽けり
我れ獨り醒めし夜に
庭の木木に。

湖の上になびく霧
よせて鳴る月の光
よもすがら消えてはうかぶ現。

ここの山のいただき
南の見ゆる終、
那須の山けむりはるかに
うかうかともゆる南。

わがゆく北は
灰色の黄の山山
眼に迫り、胸を壓し
ながれゆく冬の朧。

波の上

あかるき波の上
聲しもあらず
月くだけ搖るるなり
沖邊はるかに。

うるはしき大空を
かけりゆく魂は
しろがねのけむりとぞなる。

牛

牛はあゆむ
日の落つるくだり坂を、
あかきころもの霞被て
額のあたり耀よひつ。

擴ごる風の、吹き入りて
痕とどめたる雲の色、
薫り豐かにそことなし

日も穏どかの下り坂。

首突きいだしおし默り
目は一心に泛かべたる
何か床しき蓮華草
それと知らるるくだり坂。

あゆみの練りや、角光る
疲れごころの砂ぼこり
さみしき雲も一入に
しみて耀くくだり坂。

二年(印)
浮つ

冬

三十四年月

路の上に日は去りゆき
列びし立木に風がしのぶ
車ゆき、人疎らに
あゆみの反響す。

軒黑く夢み
馬盥は地に蹋み
長く引く子等の叫び

靄に消ゆる。

あゝ、暮れの日は寒み
村はかなしき夕、
老いたる魂のごとく
さらばふ冬の餘炎。

大波

海原のゆるき逶迤り
落ち居ることの絶えてなく
岸より岸へとつたふなり。

わたしくる其波、ありと思へば
はや果てしもなし、去りて幾波折。

日の光差し添へり、心澄む今

蒼き、香りの中に涌き立つ
朱の赤の黄金じき。

されど、こは如何なるさびしさぞ
大いなる、動くものなる
この刹那の海は。

秋の草木

秋の草木、早、こがね色なり、
花やかに照り合ふさま、うるはし、
幽なる喜悦みちくゆりて
一すぢの煙に交じるこころ。

あゝ、秋の日、
空かけてゆく小さ鳥、
聲なき聲の滿ちて、
心かなし。

空の鏡

空の鏡にうつる
木の葉の一つ一つ
今夜の無言融けて
あかるき愁となる。

月は、迅く、
かうかうと風吹き
路のべに動く塵わら。

往通の人は絶えぬ、
しみて青き石ぼとけの
葉かげの闇に立たす。

その夢のすがた
空には見ゆるなれ。
風吹き
風吹く。

黑き小舍

黑き小舍をめぐりて
幽けく滿つるこゑ
夜をこめて
草の葉に禱りあり。

小舍の外
眞夜中の雨はふる、
生けるもののありて

そば立つ草の葉。

よろこびはぢくなみなり
おごそかに歌ふ歌なり
つたはり行き
超えゆき
一つの道となる道なり。

雨は降る、大野に
　ち滿つる聲あり
我れは見る、光に
草の葉の飛べるを。

赫よふ雲

赫よふ雲のほとり
あまたの影寄りつどへり、
そを見つつあれば
大野の上に落ちぬ。

麥の穗末
みな照りかへし
寂たる氣色は

涙をさそふ。

人は道の上に
二人また三人
對ひゐて語らず
夕日赤く。

風はおもかげを
ちらめかす。
また眼を吹く
其の力。

あかき日の中に

あまたの影寄りつどへり、
人は往く
四人、また五人。

唄

日が光るのみ、幼き子が唄へば
「蝶蝶、蝶蝶」
かくうたへば。

草の茎をさやぎて出づる水
また微風の
喜悦の喉。

誰かうたふ、獨りならで
遍(あまね)き中に
そが唄を。

はてしなき空のきはみ
在るとなし、光る顔
綠なる幻に。

ながるる白き野川の水
木も草も
おのづからなる伴奏(ともあはせ)。

日が光るのみ、幼き子が唄へば
「蝶蝶、蝶蝶」
かくうたへば。

魚籠

魚籠もちてあそぶ子は
畦みちをひた走る
その聲、一心に
朱の靄に光りぬ。

水はぬるみ、日が映り
彼の面は熱し、
されど、彼窺く

瞬きせず。

柔かき足にも、腹にも
泥あがりぬ、
田芹は香ふ
あはれその泥の子。

彼は獲ぬ
深き獲物を。
されど、されどなほ
魚籠は空し。

彼は得ぬ

寶を
少しなる魚
幻に重し。

春く日かげ面を照らし
おほけなし此子、
かへる野路を忘れて
專念に遊ぶ。

遠き響

水はゆきかへりて
終日
音たてず波を上げず
入江の上こえて
霞める日。

ただ浮かぶ蘆の葉に

遠きそよろぎ、
聽けどもあかず
見れどあかぬ
その響。

實にたがはじ
陸と水、
現身の
胸も、搖るがに
陸と水。

白日の海底に光うつり
夢をふく、

かをりをふく、
蘆の葉の長き
遠き響。

途上

日も遠のきぬ
あかるき夕べの中
何かささやく。

黄金のふち赤らみ
人の數ちらほら
ほのに消ゆる。

既に亡き人も
今ある人も
面輪かがやき
いのち見ゆる。

舊きも
あたらしきも
なべての道。

ここを下り
またのぼる
同じ階段。

人の數ちらほら
戲むれぬ
また失せぬ。

茫として
ささやき、ささやき
わが耳を搏つ。

幻の田園終

三木露風詩集第一卷目次

廢園

廢園

忘却の歌……一一
哀しき接吻……一二
雨の歌……一五
靜かなる六月の夜……一八
こころよき群……二一
月夜の悲しみ……二四
午後の並木……二七
森にきたりて……二九
過去と「いま」……三一
丘邊の午後……三五

瓦斯の火……三八
霧の夜の曲……三九
黄昏の單調……四一
去りゆく五月の詩……四三
夏の日のたそがれ……四七
乳屋の娘……四九
墓……五三
迷へる水鳥……五五
かたち……五八
海　上……五九
林檎の樹かげに……六二
緑の丘、眞晝の地平……六四
嘆……六七
蛾……六九
邂　逅……七二
月……七四

灰　色……七六
夜のこころの夢……七八
歎　息……八〇
池の水のも……八二
時雨と樂聲と……八四
鷺　鳥……八七
雲……八九
「愛」と「孤獨」と……九〇
暗き　へ……九二
舟……九四
渚の家……九六
海鳥の歌……九八

涸れたる噴水

青ざめたる心の歎き……一〇三

時雨の音色……一〇八
内　心……一一二
秋……一一三
ベンチの別れ……一一五
「物語」かくて閉づべし……一一六
病院にて作れる……一一七
そよぐ木の葉……一一八
すすり泣くとき……一一九
さすらひ……一二〇
わかれ……一二四
落葉の時……一二六
月の中……一三〇
心の象……一三二
病院の黄昏……一三四
旅にて……一三七

「暗い扉」以下

十月のおとづれ……一四三
夜……一四七
嵐……一五〇
月の婦人……一五三
キスの記憶……一五五
樹　立……一五七
幸……一五九
日に照されたる海……一六一
海……一六三
磯にて……一六五
野路の日光……一六八
暗い扉……一七一

推移

郊外……一七七
接吻の後に……一八一
異國……一八三
推移……一八五
黄昏の一刻……一八七
病める薔薇……一八九
薔薇を見て若人の歌へる……一九〇
晴れわたる空のもと……一九二
時計の歌……一九六
信仰と牢獄……一九八
青色の鱒……二〇〇
暮色……二〇三
森林にて……二〇六
蟲と夜と……二〇八

深夜……二一〇
霧……二一四
闇……二一六
鴉……二一八
路傍の想……二二一
錆の華……二二三
港江……二二五
八月の一日……二二八
溝の蠅……二三一
くらげ……二三四

二十歳までの抒情詩

雨ふる日……二三九
古徑……二四三
鐘鳴る晝……二四五

畫の曲……二四七
五月ひるすぎ……二四九
燕……二五二
白　畫……二五四
まひるの渚……二五七
夏の林にて……二六〇
南方の五月……二六二
磯の夕……二六五
夜となる前のひととき……二六八
椋の花……二七一
青き國……二七三
朝　空……二七六
丘の家の窓より……二八〇
月光と憧憬と……二八三
鷗……二八五
その夜……二八七

木曾川……二九〇
ふるさとの……二九二
廐……二九四
水……二九六
芽……二九八
渦……三〇〇
晴　間……三〇二
來る畏れ……三〇四
愛のふるさと……三〇六

寂しき曙

神と魚……三一五
沼のほとり……三一七
暗き地平……三一九
夜の碑銘……三二一
呼吸……三二四
快樂と太陽と……三二六
失望……三二九
憐憫……三三一
消えゆく畫……三三三
凍えてひびく芭蕉……三三五
黄昏……三三七
冬の詩の中より……三三九
小逕……三四〇

されどもし……三四二
廂……三四三
別るる君の眼……三四五
秋はそこより……三四六
「眠」の歌……三四八
秋のをはり……三四九
冬……三五一
心……三五三
不信……三五四
ひとりの路……三五六
經驗……三五七
翼……三五八
日沒……三五九
屋根の上……三六一
音樂……三六三
庭の窪地……三六五

寒き「のぞみ」……三六七
眠のまへの詩……三六九
秋の夜の小鳥……三七一
十　月……三七二
雨の戀……三七四
青　春……三七五
殘れる記憶の色……三七七
夜の追懷……三七八
月と風……三八〇
涙……三八二
幻の墓……三八三
夢……三八六
九月の色と響……三八七
汝の戀……三八九
鐘……三九一
搖るる小舟……三九二

夏……三九四
過ぎし日の窓邊……三九六
戀の椅子……三九八
眠をさます夜半……三九九
小　曲……四〇一
胸……四〇三
ふたりの夜……四〇四
慾　望……四〇六
心の奥……四〇九
生　物……四一五
日かげの停車場……四一八
午後の都會……四二一
顏の憂鬱……四二三
我が憂愁……四二五
沼河比賣のうた……四三一
寄くさ……四三四

白き手の獵人

雪の上の鐘……四三九
雪の上の郷愁……四四二
白き手の獵人……四四五
死したる戀……四四七
すたれし聲……四四八
苦しき眠……四五〇
祈　願……四五二
指……四五五
延びゆく夢……四五七
古き月……四六〇
灰色の女……四六二
焔と風……四六四
白日の歌は死せり……四六六

愁　訴……四六八
夜の雪……四六九
記　憶……四七一
惱める夕……四七二
渦まく秋……四七四
黄昏のゆめ……四七六
夜……四七八
窓……四八〇
苦惱の歌……四八二
死のねがひ……四八六
櫂……四八八
現　身……四九一
さぎりのみね……四九四
梅　檀……四九六
戀の囁り……四九八
僧の娘……五〇〇

二つの重み……五〇九
早春……五一二
回顧……五一四
懶き唄……五一五
寂寞……五一七
絶息……五一九
遥音……五二一
道のほとり……五二三
月と蜘蛛と……五二六
月の韻律……五二九
ある日の海の新……五三一
憔悴……五三四
蔦……五三六
寺……五三八
祭……五四〇
舟夫……五四三

燈火……五四五
反影……五四七
反響……五四九
羽搏たき……五五一
海の上に……五五三
松……五五五
伴侶……五五七

幻の田園

春……五六三
袖は寢ねて……五六五
雪後……五六七
小童……五六九
瞳……五七一
女性……五七三
村村……五七五
沼の蘆……五七七
正午……五七九
古瓶……五八一
森……五八四
蠅を見て……五八六
空と海と……五八八

緣……五九〇
帆綱……五九二
夜の小川……五九四
鹿ケ谷法然院にて……五九五
あけがた……五九七
夏草……五九九
夕暮……六〇一
木の洞……六〇三
谿間……六〇五
草を藉き……六〇六
岩と鳥……六〇七
或る日の黃昏……六〇九
雲雀……六一一
撓める枝……六一二
夜の野……六一四
あかき夕……六一六

稻田……六一七
宙の鳥……六一九
笑の露……六二一
晩秋……六二三
雨心……六二四
秋……六二六
花と果實……六二八
紡車……六三〇
田の刈跡……六三二
微雨……六三四
湖水の印象……六三六
破船……六三八
悲……六四〇
小詩二章……六四二
波の上……六四四
牛……六四五

冬……六四七
大波……六四九
秋の草木……六五一
空の鏡……六五二
黑き小舍……六五四
赫よふ雲……六五六
唄……六五九
魚籠……六六二
遠き響……六六五
途上……六六八

あとがき

御愛深き天に在ます父なる神の御恵みによつて、私は、詩の道を歩るいた。

私は夙に詩を作つた。私が詩を作るやうになつたのは、偏へに神様の御恩寵であるが、其の中にあつて母の愛も、與つて力があつた。母は、私が幼年の頃、私に、長い詩を歌つて聞かせて呉れた。其れが子守唄であつた。私は、母が、其の長い詩を度び度び歌つて呉れた事を覺えてゐる。其れを聞くと、何とも言へず、懐しい氣がした

母は、宗教心の篤い人であつた。そして、詩や歌の嗜好のある人であつた。繪を描いて、それを見せて、子供の私を遊ばせて呉れる　もあつた。

私は、幼年時代から、自然に親しんだ。殊に、山を愛した。私は、獨りて、山に登つたり、溪谷の水を掬んだりして遊んだ。

天の父なる神の御恵みて、自然に親しんでゐるうち、詩想が、養はれて行つた。

私が、九歳の時（明治三十年）に、私の鄕國の郡て、其の郡内の各小學校聯合の、生徒作品成績審査があつて、私の一文が、最も優等に、選ばれた。

十二歳の頃は、いろいろ擬古文を作つて、其の文を綴ぢて、學校の教師に、見て貰つたりした。

其の年か、翌くる年かに、私は、左のやうな俳句を作つた。

赤蜻蛉とまつてゐるよ竿の先き

今、思ふに、此句は、私の童心を示したものてある。

明治三十六年、卽ち私の十五歳の時は、文を多く作り、又、詩作や、短歌や俳句の吟詠が多かつた。

其れ等の作品は、姫路市から出てゐた姫路新聞に掲げられた。

十六歳の時は、詩「書寫山」を、雜誌『文庫』に出し、其の翌年に「家島」「胸なる響」「宵の灯」等を、雜誌『新聲』に發表し、又「花小傘」を、雜誌『新潮』に出した。

明治三十八年卽ち私の十七歳の夏に、私は、詩歌集『夏姫』(詩十篇、短歌百九首を收む)を、岡山市の血汐會から出版した。

此『夏姫』に收めた作品は、主として、明治三十八年に作つた詩歌で、其れ以前の多くの詩や短歌は、殘して、收めなかつた。

『夏姫』を、私の處女作の詩歌集とし、明治四十二年に出版した詩集『廢園』を、出世作と見る。

『廢園』以後、私は、今日迄、幾多の詩集を公にした。

其れ等の詩集に就ては、別に、解題を書いて示した。

私は、初め、抒情を以て、詩を作り初め、後、象徵詩に至り、短唱を作り、更に、宗教詩を書くやうになつた。

私は、詩に關する意見を包藏してゐる。其の詩論や、又、私の詩風の變遷に就て、知りたい讀者は、『露風詩話』『詩歌の道』『美學草案』等を讀まれたい。

三木露風詩集は、第一卷以後、順刊するが、數卷を以て終るものではなく、年を趁ひ、新作の詩集又は詩を網羅し、一生續けて公刊したいと思つてゐるものである。

大正十五年十月

三木露風

詩集解題

『廢園』

『廢園』は、明治四十二年の出版である。私の、明治三十九年から同四十二年八月迄の詩を收めた。

『廢園』の名のあるのは、それが、私の青春の一時代の感情、詩想を表はし、一面に、私の居住してゐた東京市外雜司ヶ谷の六合舍の在る園か、廢園の趣があつた爲めである。

此詩集に收められた作品の詩體は、音數律に依つた物と、自由詩とである。自由詩は、雅文體のと、口語體のとがある。「二十歳までの抒情詩」の部に收めた詩は、音數律を以て、書かれた物である。

『廢園』の自由詩は、內心・感情のリヅムを、旨として、書かれた。

此の詩集中の口語體の詩、「暗い扉」は、私が口語體で詩を作つた初めの作である。此の詩は、象徴的な作品である。山田耕作氏が、後年、此「暗い扉」の交響樂を作つた。

『廢園』には、抒情詩が多い。又、其他に、象徴詩や、印象詩がある。

『寂しき曙』

『寂しき曙』は、明治四十三年の出版である。

靈的の曙を意味する名だ。

『廢園』の時代から見ると、此時期の詩は寂しくなつてゐる。又、靈的になつてゐる。

『白き手の獵人』

『白き手の獵人』は、大正二年の出版である。

此詩集は、抒情的象徴詩と、思想的象徴詩とが多い。又、劇詩「僧の娘」を收め

た。初版には、散文を加へたが、此詩集には、其の散文を入れなかつた。

『幻の田園』

『幻の田園』は、大正四年の出版である。私が、池袋に、住んでゐた時の作品で、此詩集は、象徴詩集と言つて宜しい。私の其の頃の人生觀及び自然に對する觀照を、象徴化した物が多い。

三木露風著作目錄

詩歌集	夏姫	一九〇五年	血沙會
詩集	廢園	一九〇九年	光華書房
詩集	廢園（再版）	一九一〇年	博報堂
詩集	寂しき曙	一九一〇年	博報堂
詩集	白き手の獵人	一九一三年	東雲堂
詩集	露風集	一九一三年	東雲堂
詩集	幻の田園	一九一五年	東雲堂
論集	露風詩話	一九一五年	白日社
詩集	良心	一九一五年	白日社
詩集	生と戀	一九二〇年	アルス
詩集	蘆間の幻影	一九二〇年	新潮社
童謠集	眞珠島	一九二一年	アルス
詩集	象徵詩集	一九二一年	アルス

詩集	修道院詩集第一卷 信仰の曙	一九二二年	新潮社
詩集	青き樹かげ	一九二二年	新潮社
唱歌集	小學生の歌（四卷）	一九二三年	大阪開成館
論集	美學草案	一九二四年	大阪毎日新聞社
詩論集	詩歌の道	一九二五年	アルス
詩集	象徵詩集（再版）	一九二五年	アルス
感想集	修道院雜筆	一九二五年	新潮社
論集	修道院生活	一九二六年	新潮社
歌集	トラピスト歌集	一九二六年	アルス
詩集	修道院詩集第二卷 神と人	一九二六年	新潮社
論集	神への道	一九二六年	イデア書院
童謠集	お日さま	一九二六年	アルス
童謠集	小鳥の友	一九二六年	新潮社
詩集	三木露風詩集（第一卷）	一九二六年	第一書房
論集	露風詩話 增補再版	一九二六年	第一書房

三木露風詩集

大正十五年十一月十二日印刷
大正十五年十一月十六日發行　定價三圓八十錢
第一刷千五百部

著者　三木露風
刊行者　長谷川巳之吉
東京市芝區下高輪町二二
刊行所　第一書房
振替東京六四二二三
電話高輪一二九四
印刷者　萩原芳雄

上田敏遺著	上田敏詩集	四六判七百六十頁 背皮金泥美本	定價 三圓八十錢	
野口米次郎著	表象抒情詩	四六判百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢	
野口米次郎著	第二表象抒情詩	四六判百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢	
堀口大學著	詩集 砂の枕	四六判二百八十頁 表紙木判刷美本	定價 二圓	
堀口大學著	譯詩集 月下の一群	菊判七百六十頁 背皮金泥美本	定價 四圓八十錢	
アポリネエル著 堀口大學譯	動物詩集	四六判ジュフイ畫 繪入金泥銀泥美本	定價 二圓	
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	菊判本文二色刷 表紙木判刷美本	定價 二圓八十錢	
日夏耿之介著	日夏耿之介詩集	全三冊豫約非賣品	讓價 五十圓	
三富朽葉遺著	三富朽葉詩集	四六判八百八十頁 背皮金泥美本	定價 四圓五十錢	
堀口大學譯	譯詩集 空しき花束	初版別製	近刊	
三木露風著	三木露風詩集	初版別製	近刊	
西條八十著	西條八十詩集	初版別製	近刊	
茅野蕭々譯	リルケ詩集	初版別製	近刊	

第一書房刊行書目

土田杏村著	日本 支那 現代思想研究	菊判 三百餘頁	定價 二圓五十錢	
土田杏村著	戀愛の諸問題	四六判四百九十頁 總クロオス美本	定價 二圓三十錢	
矢野峰人著	近代英文學史	菊判八百卅頁特刷 挿繪入總クロオス美本	定價 六圓五十錢	
矢野峰人著	詩學雜考	四六判百八十頁 白バクラム美本	定價 一圓五十錢	
三木露風著	露風詩話		近刊	
慶大教授 ヴアインズ著	野口米次郎論	四六判二百四十頁 口繪入バクラム美本	定價 一圓八十錢	
野口米次郎著	ブックレット（既刊廿五冊）	四六判百二十頁 口繪入三枚或四枚	各冊 六十錢	

松岡讓著	法城を護る人々	四六判全三册 白布金泥美本	上卷生活篇 二圓六十錢 中卷信仰篇 二圓三十錢 下卷批判篇 二圓六十錢	
佐藤春夫著	女誡扇綺譚	四六判百三十頁 背バクラム木判刷美本	定價一圓	
岸田國士著	岸田國士戲曲集	四六判二百八十頁 背タロオス函入美本	定價一圓六十錢	
田島淳著	田島淳戲曲集	四六判二百八十頁 背クロオス函入美本	定價一圓六十錢	
佐藤春夫著	佐藤春夫戲曲集		近刊	
飯塚友一郎著	歌舞伎細見	菊判千二百頁 挿繪三百餘美本	特價八圓五十錢	
灰野庄平著	大日本演劇史		近刊	

第一書房刊行書目

ポオル・モオラン著 堀口大學譯	戀の歐羅巴	菊判三百四十頁 背赤平金泥美本	定價二圓五十錢	
ポオル・モオラン著 堀口大學譯	レヰスとイレエン	菊判總バクラム用紙書簡紙美本	定價二圓	
ジュル・ロオメエン著 堀口大學譯	キネマシナリオ ドノゴオ・トンカ（科學の奇蹟）	四六判二百四十頁 木判表紙滿洒	定價一圓三十錢	
フィオナ・マクラウド著 松村みね子譯	かなしき女王	四六判二百九十頁	定價一圓八十錢	
ジャン・ラシイヌ著 内藤濯譯	悲劇 ブリタニキュス	四六判背皮四洋木版色刷二枚美本	定價二圓	
柴田天馬譯	聊齋志異	菊判三百九十頁 唐紙帙入美本	定價三圓	

第一書房刊行書目

大田黒元雄著	洋樂夜話	四六判二百八十頁 黑赤クロオス美本	定價二圓
大田黒元雄著	歌劇大觀	四六判八百頁函入 總クロオス美本	定價四圓
大田黒元雄著	名曲大觀	四六判三百十頁 黃布表紙美本	定價二圓
大田黒元雄著	靈西亞舞踊 七百五十部限定出版	四六倍判原色版十枚寫眞四十枚 特製最上本	定價十圓（十五年中）特價七圓五十錢
大田黒元雄著	音樂の横顔	四六判二百八十頁 挿繪十枚美本	定價二圓
大田黒元雄著	海外音樂旅行 華かなる回想	四六判二百三十頁 背黑バクラム美本	定價二圓
大田黒元雄著	西洋音樂入門	四六判樂譜入 總クロオス函入	定價一圓三十錢
大田黒元雄譯	水の上の音樂	四六判二百三十頁 背白バクラム美本	定價二圓
ロマン・ロオラン著 大田黒元雄譯	近世音樂の黎明	菊判三百三十頁 バクラム紐クロース挿繪十二枚美本	定價三圓五十錢
ロマン・ロオラン著 大田黒元雄譯	過ぎし日の音樂家	菊判四百五十頁	近刊
アダム・カアス著 大田黒元雄譯	管絃樂及び管絃樂法の歷史的研究	菊判五百餘頁 樂譜入バクラム 總クロオス美本	定價五圓
シリル・スコット著 大田黒元雄譯	音樂に關聯せる近代主義の哲學	菊判二百餘頁	定價二圓
リムスキイ・コルサコフ 服部龍太郎譯	ロシヤ音樂年代記	四六判 挿繪十葉美本	定價二圓

517
553/1

終